曠野の花

石光眞清

龍星閣版

昭和三十三年七月十日　印刷
昭和三十三年七月二十日　発行
昭和四十四年八月二十日　第五刷（写真増補）
昭和五十一年七月二十日　第八刷

定価　千五百円

著者　石光真清

刊行者　澤田伊四郎
東京都千代田区九段南四ノ八ノ三四

発行所　株式会社　龍星閣
東京都千代田区九段南四ノ八ノ三四
振替口座東京三三六
電話（二六一）九二七二

印刷・精興社　製本・三水舎

曠野の花

石光真清の手記

目次

ウラジオストックの偽法師……五
アムール河の流血……三
異郷の同胞たち……四三
血の雨と黄金の雨……六一
私の願いとお君さんの願い……八〇
散りゆく人々……九六
曠野の花……一一四
まごころの果て……一四一
哈尔浜の洗濯夫……一六一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お花さんの懺悔録……一七三
めぐり逢いの記……一八五
お米の失踪……二〇六
秘密計画……二二〇
逃亡日記……二四一
お花さんの恩がえし……二五八
人の運命と国の運命……二八一
志士と文士と密林の女……三〇三
この日のために……三一六

一、故石光真清が秘かに綴り遺した手記は、明治元年に始まり大正、昭和の三代に亘る広汎な実録である。これを公刊するに当って、年代順に整理編集し『城下の人』『曠野の花』『望郷の歌』の三著に分類した。

二、この三著は著者が自ら体験した事件と生活記録で、人生の機微にふれて余すところがないが、同時に著者が生きて来た「日本」自らの生活史であり、また東亜諸民族の歴史の歩みでもある。従ってこの三著はあわせて一巻として読まるべき意義と内容を持っているが、いわゆる小説における「続きもの」ではない。

三、『城下の人』は昭和十八年刊のものがその一部をなし、その他の大部分は未発表のものである。

四、『曠野の花』の大半は昭和十七年刊の『諜報記』が根幹になっているが、当時の社会情勢から発表を憚かられた部分と脱落していた部分を新たに追補して、全面的に再整理したものである。これによって手記本来の姿に立還ったので敢えて改題した。

五、『望郷の歌』は全篇未発表のもので、これをもってひとまず手記の明治時代を終る。

六、三著それぞれの書名、章題、区分はすべて手記によらず、また文体、会話、地名などは出来るかぎり現代風に改めた。

七、三著をなす手記と、それに関する資料は尨大複雑であり、もともと発表する意思で書かれたものでなく、死期に臨んで著者自ら焼却を図ったものである。その中には自分を他人の如く架空名の三人称で表わしたものさえ多く、その照合と考証に多くの年月と慎重な努力を要した。従って焼却された部分や脱落箇所の補綴や、全篇に亘っての考証は、編者（嗣子石光真人）が生前の著者から直接聞き正し、また当時の関係者から口述を得たものによって行ったほか、生前の著者を知る多くの人々の協力によって、こゝに全容の完成を見るに至った。しかし事実を述べるに、なんらの作意を弄せず、私見もさし挿んでいない。

ウラジオストックの偽法師

一

青黒い北の海には早くも秋風が吹き初めた八月二十五日（明治三十二年）ウラジオストックの桟橋に着いた日本郵船相模丸のタラップから、船長を先導にして日本郵船社長近藤廉平、参謀本部次長田村怡与造大佐（中将で病没）町田経宇大尉（後の陸軍大将）等がいずれも平服姿で降りて行った。その後からトランクを片手に、港に連なる街並を眺めながら降りたのが、当時休職の歩兵大尉でロシアへ私費留学を許されて来た私であった。

ウラジオストックと云う名前が東洋征服を意味すると云っても、当時のこの都市は鉛色の空のもとに疎らに拡がった淋しい港街で、商人はほとんど清国人であり、労働者は大部分が韓国人であった。十数年前には街に虎が出て市民を脅かしたこともあるほど淋しい漁港に過ぎなかったが、八年前にシベリア鉄道が起工されてからは、急にヨーロッパ・ロシアの文化が運ばれて来て、丸木小屋と土煉瓦の街にも石造の官庁や赤煉瓦の住宅が建ち始め、ヨーロッパ風の服装に胸を張った女たちが人目を惹くようになっていた。

まだ街の様子もよく判らない上陸二日目の八月二十六日、私は田村怡与造大佐に伴われて西本願

寺のウラジオストック出張所を訪ねた。この出張所には参謀本部から派遣されている花田仲之助少佐（鹿児島市出身）が清水松月と云う僧名で住職を務め、機密の調査に当っていることは私も参謀本部から秘かに知らされていたし、面識を得ておけば何かと便宜があろうとのことであった。

西本願寺出張所は在留邦人の寄附によって出来た赤煉瓦の建物で、説教所と公会堂を兼ねていた。在留邦人と云っても女郎屋の主人や洗濯屋、ペンキ屋、理髪屋などが主なものであったから、集まる寄附金も大したものでないらしく粗末な設備であった。声をかけると顎髭を垂らした黒い法衣（ころも）の僧が現われて頭を下げた。

「ようおいで下はりました。松月でござります……」と云って私たち二人を説教所の畳敷の広間に案内した。

「花田君どうだな、一向に様子がわからんのでやって来たよ」

と田村大佐が腰を据えると、松月師はそのまま奥に入って、やがて茶を持って現われた。住職と云っても小坊主もいない一人暮しのようであった。

「どうだな、うまく行っとるかな」

松月師は破れ畳に両手をついて頭を再び下げて云った。

「ありがとうございます。お蔭様で在留の方々（かたがた）にも顔なじみになり、お説教にお集りの信者も月毎にふえまして……」

と全く坊主の態度で応接した。恐らく女郎屋の主人や洗濯屋の親爺にも、このように丁寧な態度をしていたのであろう。

「いや、花田君、仕事の方さ。一向に報告も来ないが君のことだ、万事進めておるとは思うが、様子がわからんのでな」
と云った。田村大佐の顔にも語調にも明らかに不快の色が現われた。けれども清水松月師は少しも僧形を崩すことなく頭を下げて布教を語るばかりであった。私は異様の感に打たれた。すると、田村大佐は居ずまいを正して切口上になって云った。
「花田君、久しぶりに会ったが君は全く坊主になっとる。坊主の真似は必要だろう、任務だからな。だが僕の前でそのざまはなんだ。失礼ではないか。だが、本当に坊主になりたいなら坊主になったらよい。軍人がいやなら、いやだとはっきり云ったらよい。無理に引留めはせん。この三年の間、君は本部に対して務めを果しておらん。それは君自身が一番よく知っとるはずだ。どうだ、軍人の務めを果すか、坊主になるか、はっきり返答してもらおう」
松月師は咄嗟に法衣の袖を開いて、破れ畳に両手をついて答えた。
「私は坊主で結構でございます」
田村大佐はこれを聞くと、坊主に用はないと云わんばかりに、すくっと立ち上って、呆然としていた私を促して出張所を辞した。私は全身に冷汗を感じた。今日まで参謀本部と花田仲之助少佐(清水松月師)との間にどんな行きさつがあったか知らないが、初対面の席上でこんなことになろうとは夢にも思わなかった。
その翌朝のことである。町田経宇大尉と同宿の扶桑舎で朝食を済ませて、帳場の傍らでぼんやりしていると、遠慮がちに戸をあけて入って来たのが、まぎれもなく昨日会ったばかりの清水松月師

であった。はっとして挨拶しようとすると、師は私の存在を全く無視して、帳場の女将に低く頭を下げて云った。

「本願寺の松月でござります。あすの金曜日には、いつものごつお説教ばしますけん、お出でつかはり」

女将はちらりと見てうなずいただけであった。傍らにいた町田経宇大尉にとっては花田少佐は同郷の先輩であった。そっと町田大尉の様子をうかゞうと彼は顔をそらせて見ぬふりをしていた。女将の話によると松月師はこのように説教の前の日に、三十軒ばかりの在留邦人の家を訪ねてお願いをするのだそうである。女将の批評によるとお経も下手だしお説教も面白くないので、ほんのたまにしか行かないそうだが、物腰が柔かく熱心なので信者が次第にふえているとのことであった。

当時ウラジオストックには新聞社の特派員として日本新聞の井上亀六、時事新報の菅某、大阪毎日の松島宗衛、国民新聞の上野殊羯（岩太郎）朝日新聞の阿部野利恭がいて、船便で記事を送っていた。阿部野利恭は私と同郷の熊本市出身で、当時農商務省の練習生であるとともに朝日新聞の通信員を兼ね、かたがた熊本茶業組合の出張員の資格で細々ながら紅茶輸出の仕事もしていた。いずれの面々も一見識を備えた立派な人物であった。この連中の間でも松月師が話題にならぬはずはない。

「あれは偽坊主たい」

阿部野利恭は簡単に断定を下していたが、そのくせ松月師と一緒にロシア人の家の女の家庭教師からロシア語を習っていた間柄である。

「えらい、あっちこっち歩き廻る坊主でな、お経も下手糞、説教も下手糞……なんともはや得体

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の知れん坊主ですたい」
と云っていた。それから間もなくのこと、新聞記者仲間が貿易事務所に集っていると、阿部野利恭が大軀をゆすって笑いながらやって来た。
「大発見！大発見！ついに偽坊主の正体つかんだばい。あれあ大変な食わせもん。実はな、いまさき一緒に風呂屋に行ってな、フト気がつくと、あの坊主のものがこればかりの使い古した逸物たい。あれあ立派な偽もんたい」
と大声で笑った。これを聞いて集っていた面々も膝を叩いて笑い興じた。私もおつきあいに笑いはしたが、何か割り切れないものを感じて考えこんでしまった。
町田経宇大尉もウラジオストック駐在武官の武藤信義大尉（後の男爵、元帥、口絵6図）も清水松月こと花田仲之助少佐については語りたがらなかったし、同師と街路ですれ違っても知らん顔をしていた。任務のためであろうか、それとも何か子細があってのことであろうか、私には解せなかった。

二

そんなことがあって、清水松月師の行動に心を惹かれていた時、同師が布教のためにハバロフスクに出発した。阿部野利恭はこの計画を聞いて、それは丁度よい、わたしも行ったことがないから……と同行することになった。十日ほどして帰って来た阿部野利恭の話はこうである。
「本願寺派の安倍道瞑と云う坊さんがいてね、この坊さんが協力して布教の準備をしてくれた。

説教所と云うのは女郎屋の会合所とでも云ったもので、松月師と一緒に訪ねて行くと、説教をする高座の上に女郎屋の主人連が車座になって一六勝負の真最中であった。われわれ二人が入って来たのをジロリと横目で見ながら、知らん顔して勝負をやめようともしない。私たち二人は暫く黙って眺めていたが、まずわしの癇癪が破裂した。

『けしからん、失礼な奴等だ！』

すると松月師が

『まあ、まあ我慢しなはり、放っておきなはり……』

と立ち上ったわしを引留めて念仏を唱え始めた。だが高座の上では相変らず勝負の最中だし、松月師は松月師で念仏ばかし唱えておるし、全く閉口してしまった。

『松月さん、わしは帰る！』

と再び立ち上ると、松月師はわしの腕をとって引留める。わしもやむなく再び腰かける。こんなことを繰返していると、そこへ一人の品の良くない男が入って来た。

『やあ和尚さん、何しに来なはった』

『お説教に参りました』

『それはご苦労さんで……して幾日ご逗留かな』

『三日の予定でございます』

『へえ、三日もお説教ばしなはるか。わしは急がしかばってん三日はおつき合い出来まっせん。一日なら参りまっしゆ』

『ぜひお出で下はり。この土地のゴゴ（長崎弁でお嬢さんの意、ここでは女郎のこと）たちにもよろしゅう伝えてくれまっせ』
と頭を下げた。その男が去ってから松月師にあの男は何者ですかと問うたら
『ポーフンですたい』
と云った。ポーフンとは支那賭博の札売りのことである。わしは馬鹿馬鹿しくて腹が立つて来た。松月師は相変らず口の中で念仏を唱えていた。
『松月さん。坊主というものは、えらい辛い商売ですなあ。人が死にはったらお経ばし上げて、鐘叩いて、時折お説教しとれば良かごつ思うとったが、ポーフンのご機嫌までとらにゃならんですたいなあ。お察ししますばい』
と皮肉まじりに云うと、眼を閉じて念仏を唱えていた松月師が『ありがとうございます』と頭を下げて、また念仏を続けた。
安倍道暝と云う坊主も似たり寄ったりで、破れた詰襟服に色の褪めた袈裟をかけ、至って風采の上らない奴であった。まあシベリアや満洲に流れついた坊主は、大体こんなものだろう。
お説教に集ったものは大部分が女郎衆で、男と云えば女郎屋の親爺と博徒風情の得体の知れない者ばかり、それでも五十名近くいたであろう。松月師は例によって、下手ではあるが熱のこもったお説教を一時間ばかりやった。丁度その頃雨が降り出した。ほとんど傘の用意がなくて帰れなかった。すると松月師が『皆さん、暫く待っておいで、傘ば集めて来ますけん』と云って、道暝師と一緒に雨の中へ出て行った。

大分時間が経ってから松月師と道瞑師が坊主頭も法衣も袈裟もズブ濡れになって、小脇に傘の束をかかえ込んで帰って来た。集めた傘は三十本ほどで、女郎屋を廻って集めたものだそうである。坊主と云うものは……こんなことまで、せにゃならんものだろうかと、わしは呆れもし、同情もし、馬鹿馬鹿しくもなった」

阿部野利恭はこのように語って苦笑した。すると私と一緒に傍らでニヤニヤ笑って聞いていた日本新聞の井上亀六が「そりゃ上出来の方さ、あの坊主のやることは、それどこじゃないんだよ」と語り出した。

「つい先達てのことだよ。お寺におったら満洲人の女房が来て亭主が死んだから来てくれと云った。その女房は女郎上りでね、お寺の常連なんだよ。場所が支那街の中で和尚が判らんと云うもんだから僕が案内したんだ。行ってみると貧民窟さ。帰ろうと思ったが、あの坊主なにをしでかすか見てやろうと思ってね、長屋に上りこむと、汚ないこと臭いこと話にならん。暗い狭い部屋で腐ったような蒲団の中に満洲人が死んどった。枕もとにローソクが一本ともっておった。松月は丁寧に礼拝して長いお経をあげたね。読み終ったから、やれやれと思って帰ろうとすると君、頼まれもせんのに死人の唇を両手でうやうやしく拡げてね、馬鹿馬鹿しいじゃないか、接吻でもするように自分の口を近づけてナムアミダブツ、ナムアミダブツと念仏を吹きこみ始めたんだよ。こうなったらもう我慢は出来ん。僕は先に帰って来たがね……どうも、あの坊主は少々こゝが変じゃないかね」と額を指して苦笑した。

清水松月師について、このような批評を聞いたり、また田村参謀本部次長の怒りを見せられたり

しても、私の疑問は解けなかった。その後、私は自分一人で本願寺出張所に松月師を訪ねたことがある。けれども同師はウラル山脈に近いシベリアの西辺から、満洲一帯に亙っての布教を語っても、それ以外の事については微塵も語ることがなかった。そして、私が差し出した御布施の袋を額の上に押し戴いて念仏を唱えた。

私がウラジオストックを離れてから間もなく、願いにより予備役に編入の辞令が松月師の手許に届けられた。田村参謀本部次長の詰問に対して「私は坊主で結構でございます」といったその答えに対する辞令であったろう。この日限り私は同師に会う機会がなかったが、数年を経た後の日露大戦のさ中、私は召集されて第二軍管理部長を務めていた時、図らずも旅順でバッタリ花田少佐に帰り咲いた同師にめぐり逢った。同少佐も召集されていたのである。軍服の胸間に数多い略章をつけ、颯爽と胸を張って馬を走らせていたのである。（口絵23図）

「やあ石光君、ウラジオ以来の対面だなあ。今日はせわしくて、ゆっくり出来ん。無事でいたらまた会おう」

と走り去った。黒い法衣に破れ袈裟の腰をかがめた松月師の面影はどこにもなかった。呆然と見送る私をふり返りもしなかった。彼は馬賊を中核とする満洲義軍の総指揮官として、ロシア軍の後方攪乱に赫々たる功績をあげていたのである。

三

ウラジオストックの一ヶ月余は若い留学生であった私にとっては忘れ難い思い出である。下手なロシア語も、どうやら役にたつことが判ったし、下級な人々ではあったが意外にも多数の日本人が全シベリアに散在していることが自信をつけてくれた。

私の留学地については、田村怡与造大佐を中心に町田経宇大尉、武藤信義大尉と一緒に検討したが、やはり参謀本部で定めた通り当時ロシア軍のシベリアにおける最大根拠地であったブラゴヴェヒチェンスクが適当だとの結論に達した。

「一年経ったらウラジオに戻って来い、その頃に僕も来てるからな」

田村怡与造大佐は私の肩を叩いて一人旅を慰めてくれた。

「用事はなんでも知らせてくれよ、火急の事態が起きたら僕自身かけつけて行くからな」

同郷の親友阿部野利恭は私の手を握り締めて幾度も振った。

黒竜江(アムール)も結氷期を控えて、汽船も終航に近づいた十月の中旬、私は菊地正三の仮名(かめい)を名乗って、船足ののろい汽船に乗って広漠たる露満国境を西へ西へと遡ってブラゴヴェヒチェンスクに辿り着いた。(口絵5図)

菊地正三と云う仮名の由来は大したものではない。菊地は私の妻の実家の姓であり、正三は私の幼名である。こゝはロシア東征の根拠地、この町にも日本人十数名がいた。洗濯屋、女郎屋の連中に違いないが、彼等が居られる限り私もまた居られぬというわけはない。ウラジオストックで聞き及んだ在留日本人会事務所を探し当てると、全くの名ばかりの事務所で煤けた木造の小さな二階建であった。来意を告げると、若い書記は不審な顔付で私の風体を凝視した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com